

Vascular Street



よみうり FBS 文化センター 心身医学講座 「心が健康であることの条件」 ～児童期の子供の心の理解と対応～



【特別講演】
福岡大学医学部総合医学研究センター 教授 西村 良二 先生

今日は、児童期、小学生の子供たちのお話をしたいと思います。人として成長していくためにどうしてもこの時期に出会わなければいけない問題、それを発達課題と言います。その学童期の子供たちが出会いやすい問題、たとえば、不登校とか多動児 (ADHD) のお話をします。

これは、イギリスの精神科医のエヴァンス先生が、家族のライフサイクルを描いたものです (図1)。お父さんとお母さんが結婚して、2人の間に赤ちゃんが生まれ、その赤ちゃんがだんだん大きくなっていく。最初の頃は全くお

父さん、お母さんに頼っていないと生きていけなかったのが、だんだん部分的に力をつけてくる。少しずつ自立してくる。こうなってくると、依存は依存ですけどもかなり部分的な依存になります。この時期の話をして。

小学校の子供たちが出会う問題は、大きく分けると5つぐらいあります (図2)。初めは、お母さんとの段階的な分離です。いよいよ小学校に上がるとお母さんと離れて長い時間1人の力で生活することになります。小学校というのはお母さんが入り込めなくなります。すると、お母さんにも大変な不安が起こってきます。お母さんの不安とは、子

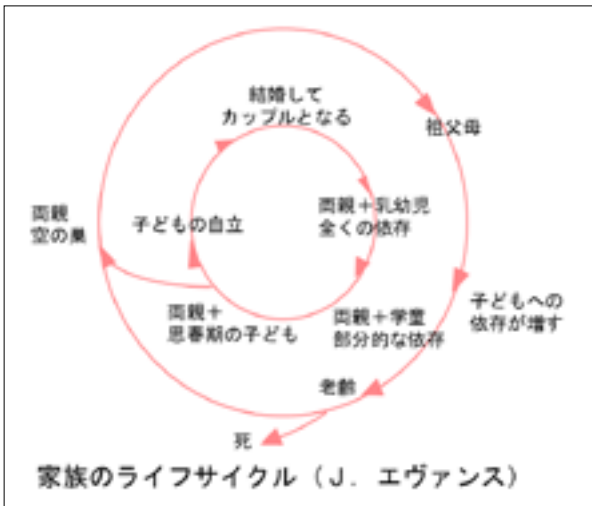


図 1

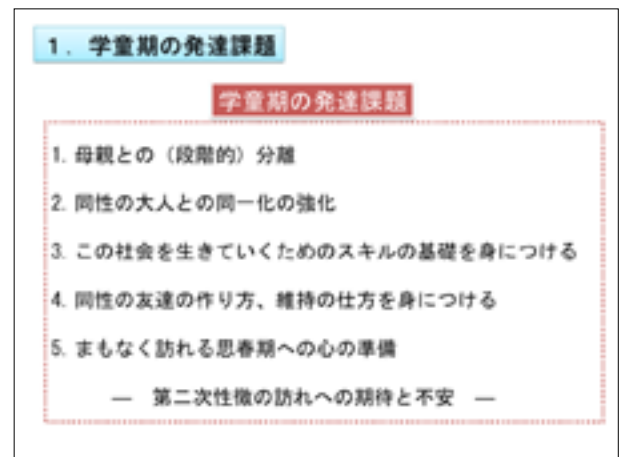


図 2

供が学校の先生にちゃんと分かってもらえるかしらという不安です。これは非常に大きいのです。子供もお母さんと離れる不安があるのです。お母さんと離れて見知らぬ世界に1人で行って行く。ある意味、子供は1人でやっつけかどうかが試されるのです。今まで5、6年の間に付てきた力で、新しい世界に1人で行かなければいけない。不安が高まるのも無理がないのです。お母さんも心配、子供も心配です。まもなく学校の先生に慣れて、友達もできてくると子供の不安は下がってくる。でも、お母さんは自分の子供が本当に先生に分かってもらえるかが不安で、それで時々お母さんが、「うちの子どもが理解されてない。うちの子供はこういう子供だけど、担任の先生はこういうふうに思っている。それはおかしい」と言って、学校の教頭先生のところに文句を言いに行くわけです。この時に考えないといけない事は、「なんて、常識のないお母さんだ」ではなくて、このお母さんがこういうことをおっしゃっているのは、お母さんの中で不安がとて強いのではないか。この不安を収めてあげないといけないと考えます。そういった意味では、小学校1年生の担任の先生は、お母さんの気持ちをくみとって、「でも、大丈夫ですよ。お子さんはちゃんとやっていますよ」ということをフィードバックしてあげる。「大丈夫なんだ」と感じさせる先生じゃないといけないのです。お母さんが文句を言うてくるから「なんですか!」という、益々お母さんは「ほらみてごらん、怖い魔女のような先生だ」と言って、お母さんの不安が高まりクレームがでてきます。小学校1年生の担任は、そういうことがわかった柔軟性をもった方が1年生担当になるべきだと思いますね。1年生の担任の先生は、一時期お母さんからとんでもない悪い先生だと思われることは覚悟しておかないといけない。そういう悪い先生だと思っていたけど、実は良い先生だったとお母さんは安心していきますから、悪い先生とされている時期を耐えなくてはならない。小学校1年生というのは、お母さんと子供の分離は大変な課題で、何とか乗り越えていけるように、小学校の先生が応援してあげてほしいのです。

2番目は、同性の大人との同一化の強化です。これは、幼稚園までは、男の子はお父さんが自分のモデルで「お父さんみたいになりたい。」女の子はお母さんが自分のモデルで「お母さんみたいになりたい」と思っています。それで、お母さんの真似をし、お父さんの真似をしながら色々なものを身につけていきます。小学校に入ると、同性の大人、お父さん以外にも大人の男性で、自分がこういう人になりたいと憧れるようなモデルが登場することが大切です。

どうしてもお父さんとお母さんと子どもの家庭生活の中では、親はどこか偏っています。どこか歪んでいるわけで

す。そういう親をみて子供たちは成長していきますが、小学校からはちょっと偏ったところ、歪んだところを学校や部活の先生、場合によっては塾の先生でもいいし、少年サッカーや野球を教えてくれるコーチの先生でもいいです。とにかく同性の大人で「私はこういう人になりたい、憧れる」、そういう人が子供の頃に出来てくることがとても大切です。つまり、お父さんとお母さんだけではなく、様々な大人から学んでいく、取り入れていくということです。それが同性の大人との同一化の強化です。小学校に入ると、今まではお母さんが一番とか、お父さんが一番だったのが、だんだんお父さんやお母さんが2番目になって、学校の先生が一番になってきます。こういう時に、お父さんなりお母さんはちょっと寂しくなります。例えば、自分の娘にこの靴下が可愛いと思って、今日はこれを履いて行ったらと勧めるわけです。すると、娘が「いや、これは履かない」、「どうして?」、「だめだもん。こんな可愛いのを履いてきてはいけないとホームルームで決まったもん。先生が言ってたもん」というわけです。そうすると、表面上、僕らは「そうね、クラスで決まったことだったら守らないといけないね」と思いながらも、だんだん自分の思い通りの子ではなくなってしまう。自分がこれが良いと言ったけど子供はそれを駄目と言って拒んだ。そういう時に小さな寂しさを感じます。だから、子供たちの成長は親からすると寂しさも一緒にあります。しかし、この先生みたいになりたいとか、身近でなくても尊敬する人、例えば、プロ野球の選手を理想にして一生懸命野球部で頑張る。そういう中で大人となっていくための価値観を身に付けていくのです。

3番目は、この世の中を生きていくためのスキルの基礎です。私たちの社会は、高度な工業化社会ですので、ここで生きていくためには言葉を覚えなければいけない、数字を覚えて計算ができないといけない。それから、物事を完成させることができないといけない。こういったことの基礎を学んでいくのが小学校で一番大事大切な課題になります。知的課題です。幼稚園の子供たちは家の中でお父さんとお母さんと自分の三角関係で悩むのです。男の子はお母さんとの結婚はできない、諦めた。その代わりに、僕は大きくなったらお母さんみたいな人と結婚したい。じゃ、お母さんみたいな人と結婚するためにはどうすればいいかと考えて、考えたら結論が出るわけです。それはお父さんみたいな人になればいい。お父さんをよく観察して、タバコを吸っていたらタバコを吸う真似をするとか、新聞を読んでいたら僕も新聞を読みたい、でも全然読めないで、早く読めるようになりたい。女の子であれば、お母さんみたいな人になれば、大きくなってお父さんみたいな人と結婚できる。それで、お母さんを観察していたら、お母さんは家計簿をつけている。数字を足したり引



いたりしている。早く数字を覚えたい、計算ができるようになりたいと思って勉強するわけです。その時期にちょうど小学校1年生に上がるので、この社会を生きていくためのスキルの基礎を身につけることができます。

ここで小学校時代に大切な事は、物事を完成させるということです。たとえば、子供たちは小学校時代に色々な趣味を持ちます。コレクションは結構多いですけど、ピアノや水泳を習うとか、色々な習い事をします。この6年間で私はここまでやれたという自信が非常に大切、極めて大切なことです。プラモデルであれば最後まで完成させたとかですね。自分が何か外の世界に関わって、そしてそのおかげで周りが変わってくれる。自分が働きかけたら周りが変わってくれたという体験です。助けを求めたら周りがこちらを向いて助けてくれたとか。何か自分が周りに関われば相手が反応してくれた。それは自信につながります。自分がこの世を生きていくために、新しいものともちゃんとやっていけるという自信につながります。働きかけて周りや環境を変える。自分が働きかければ、環境も相手のお友達も少し変わるとかの実感ができるわけです。この実感が自信につながります。水泳で25mクロールで何秒で泳げる、ここまでやれるんだとか、算数ができて難しい問題も解けるとか。どこかで何かで自分はやるのだということです。これは非常に大事なことで、これを身につけられると自信がつく。自分は周りと一緒にやっていける人間だという自信がきます。これに失敗すると僕は何もできない、そういう劣等意識で何も完成できない。自分が働きかけても誰も答えてくれない。自分は何も完成できない。そういう劣等意識や不全感が強い子供に育っていきます。

4番目ですが、同性の友達の作り方、同性の友達とどのように長続きするのかの仕方を身につけることです。男の子は男の子、女の子は女の子。小学校の1年生とか2年生ぐらいまでは、幼稚園が一緒だったとか、近所に住んでいるからということで男の子と女の子が一緒に誘い合っただけで学校に行ったりすることはありますが、3年、4年、5年となってくると、だんだん男の子は男の子、女の子は女の子のグループができて、そのグループで動くようになります。お友達をどうやって作るのか、競争心とか負けたら悔しいとか、やきもちとか色々起こるわけです。何人か友達ができると、その中でリーダーシップを取りたいと思っても押しのけられたりとか、足を引っ張られたりとか、やきもちをやって意地悪したりとか、色々やるわけです。そういうことをやれば友達関係が壊れますけど、でも、そういう妬ましい気持ちや足を引っ張りたくない気持ちが起こってきても、でも、この子とは友達でいたいから、どうやって自分のやきもちやきの気持ちをうまく抑えるかとか。

そんなことをやっていたら友達が離れる、これはまずい。じゃあ、自分の自惚れた気持ちを少し抑えないといけないとか、そういうことを友達の間でやっていくわけです。こうして、人間関係に揉まれる。小学校4年、5年、6年くらいから相当揉まれ始めるわけです。時々、自分の嫉妬心を十分に抑え切れないといじめ問題が始まったりします。

日常で起こっているいじめは、誰か1人を犠牲者にしてグループが凝集する。いじめのターゲットには、成績が優秀な子でもなります。とにかく、同じぐらいの子供たちは自分と同質であることを求めるわけです。だから、劣った子をいじめたりとかだけではなくて、上の子もいじめます。不思議なものです。引きずり下ろしたいのでしょう。この同性の友達の作り方、維持の仕方の問題は、まかり間違えばいじめの温床になる。難しいところです。この同性の友達を作る力は非常に大事なもので、人間関係で嫌なことがあっても関係を続けていくという基礎を学ぶわけです。こういうことで揉まれて大人になっていくのです。この時期に揉まれ方が少ないと対人関係が弱い、脆い大人たちが登場するのです。この能力は、中高年になっても生きてきます。小学校時代の友達関係、特に同性の友達はどうかと聞きます。そこでどんな体験があったかを聞いて、この人はどれぐらい力を持っていると推測します。小学校の時代だけではなくて、この後に中学校、高校でもこの問題が続きます。そこでしっかり揉まれることが打たれ強い、ちょっと失敗しても立ち上がれる、そういう自分、健康な自尊心とか、打たれ強い自分、失敗しても立ち上がるとか、そういうものを作り上げていきます。

5番目は、小学校の5、6年になってくると体に変化してきます。早い子は小学校4年生ぐらいで女の子は月経が始まるわけですが、体内のホルモンは体の変化が起こる前から活発になっています。それで子供たちは、そういう思春期を迎えて体に変化する。まもなく変化するぞという少し前には準備が始まります。それはどういう形で現れるかということ、子供たちが仲間で話し合っていることを聞くとわかります。とりわけ男の子は仲間で集まって何をしゃべっているかということ、お尻がプーとか、おならがプーとか、そういう汚いもの、お尻とかそういうことへの関心です。これは間もなく訪れてくる性への関心です。「A君とBさんは、何かにおうな」とか言うじゃないですか。そのときの意味は、A君とBさんが男女の仲になっているのでないかと言っているのです。このように臭いというのは、実は性的なことを置き換えた言葉になっているわけです。「臭い」は何か性的な興奮を嗅ぎ付ける意味があります。だから、この時期から思春期にかけて体臭を気にするとか、口臭を気にするのは、どうも基本的には自

分の中に起ってきている性的な変化、それを気づかれることの心配、恥ずかしさと思いますね。おならが臭いとか敏感になってきて、おならをしたらクスクス笑って、そういった笑いの中に期待と不安があるわけです。間もなく訪れる性的変化への期待と不安も密かにクスクス笑いながら仲間で不安を薄めあっている。だから、一人でいるということは、そういう性的な変化に対しても不安が強くなるわけです。みんなでクスクスやっていて、露骨に性的な話をしなくてもおならがどうか言っている中で、みんなも一緒みたいな感じがしてきて不安が和らいでくる。この効果は極めて大きいです。

それで、子ども時代にはどういう発達上の問題が出やすいかという話をします(図3)。まずは心身症。心身症とは、身体の病気です。身体の病気だけどもその病気が始まる時の事とか、その病気の経過にストレスが密接に関係しています。その身体の病気のことを心身症といいます。例えば、気管支喘息。気管支喘息そのものは体の病気です。これは、花粉とかそういったもので抗原抗体反応や免疫反応が起こるわけです。ただ、喘息という病気の中で、例えば、ストレスがあるとすごく激しい発作が起こって、ストレスがないときは軽い発作で済んでいる。そういう経過がある場合、その人が持っているその気管支喘息は心身症だといいます。ですから、気管支喘息=心身症ではありません。ということを入念に入れておいてください。子供たちはこの心身症反応が起こりやすいのです。乳児期から幼児期から小学校時代、けっこう体の症状が出て、その体の症状が心理的な要因が強くなってくるとひどくなったり、少なくなれば軽くなったりします。赤ちゃんの頃は皮膚粘膜です。ですから、湿疹ができていて、お母さんが何らかの事情でそばに居ることができない時に湿疹がひどくなって、お母さんの用事が済んで帰ってくると軽くなる。お母さんが実家に行っておじいちゃんの世話をしないといけない。1カ月間、里に帰ってて、赤ちゃんはその間に湿疹がでて、お母さんが帰ってしばらくすると元に戻った。この場合の湿疹は心身症と考えると良いとなるわけです。幼稚園になってくると少し広がってきて、泌尿器、排便、排尿、排泄器というあたりで心身反応が起こりやすいし、小学校になってくると運動器系統が加わってきます。神経系や運動器、骨格、足の痛み、関節の痛みとかです。思春期になってくるとさらに多くのことが心的要因の影響を受けやすいわけです。

実例を少しお話しします。喘息発作です。激しい発作を起こして救急で病院に来られます。小児科の先生が診るけども、検査をするとその成績は比較的良い。こんな激しい発作が起こるわけがないと先生は思われて質問をします。「この子に負担になるようなことがあったのではあり

ませんか?」と。「いや、別に」とお父さんとお母さんも言われます。そこで小児科の先生が次の質問をします。「親にとっては些細な事でも子供にとってはとても大きな背負いきれない位のストレスになるのですよ」と言ったら、お父さんが少し考えられて「あっ、そうか。そういえば、今日の夕方妻と喧嘩したね」とか。そこで「ちょっととは、どんな喧嘩ですか?」と聞きます。そうすると、どうやら「出て行け」とかそういう激しい喧嘩です。でも、世間体もあって、「ちょっとした喧嘩」です。その先生は賢くそういうことを聞かれたわけです。「出て行け」とか「出て行く」とか「離婚だ」とか言っているわけです。「その時、子供さんはどうしていらっしやいましたか?」と。お父さんとお母さんは気づかれて「隣の部屋でガタガタ震えていました」。「そういえば、その前の発作の時にも俺達、喧嘩やったような気がする」とか言って「あっ、そうよね」と。それで、このお父さんとお母さんは、子供が居るところでは激しい言い争いをされなくなったのです。そうすると激しい発作が起こらなくなりました。その子の場合、お父さんとお母さんが喧嘩したその夜に激しい発作が起こって、真夜中に子供が発作を起こすと実家へ戻る荷物を詰めるのもやめて、救急車を呼んで子供は救急車に乗って寝て、発作で意識は朦朧としています。お父さんとお母さんが心配そうに寄りそう。それを見て、きっと思っているに違いないですね。お父さんとお母さんは一緒なんだ、別れないんだと。そうすると安心してスーっとする。こんなことが多いわけです。

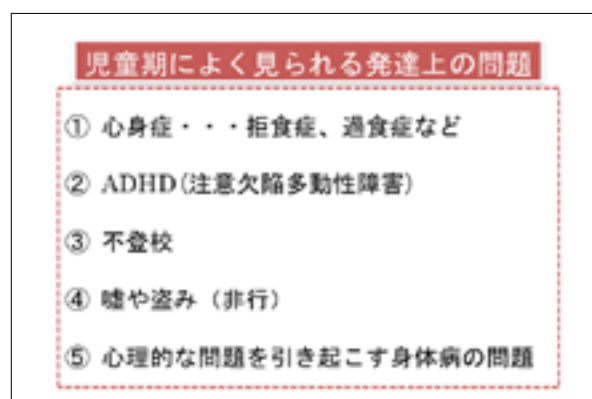


図3

特に、子どものストレスというのは、お父さんとお母さんとの不和、それ以外に嫁、姑の争い、お母さんの愛情をめぐる兄弟の争い。これらが最も多いです。そういうことを両親が気づかれてその環境を変える。子どもの前で喧嘩をしないと、「出て行け、離婚だ」ということを言わないと、ピタッと良くなります。この時期の心身症というのはそういう環境の子どものストレスを調整してあげるとよく治る。喘息そのものは治りませんが、激しい発作が起こらない。興味深いですね。だから、何か子供にとって負担になることがないか? 家庭に問題はないか? 学校に



はないか？を見ていくことです。大人からすれば「なんだ、そんなことか」です。学校の先生が怖くてビビルということもあります。ただ、興味深いのは、子供の場合は、お父さんとお母さんが相談して親が変わるとか、学校に相談すると随分子供は変わります。みるみる良くなります。これは知っておいて良いと思います。

次は、ADHD です。これは注意欠陥多動性障害といいますが、簡単に言えば多動症です。多動症は、幼稚園児ぐらいからわかります。落ち着きのない子供たちです。小学校に上がると小学校にはルールがあって、授業中は椅子に座っているものですが、ところがじっとしておられません。落ち着かなく動き回ります。注意も「こっちを見て、黒板を見るんですよ」というと「はい」と聞くけど、30秒もするとそわそわ始めます。立ってグルグル歩き回ったり。かつて、学級崩壊と言って小学校の先生たちが困った時代がありました。こういった子供たちが少しずつ増えていて、現在は特別支援学校とか支援学級とか、小学校、中学校、高校もこういった子供たちの対応があります。こういった落ち着きのない子供たちが増えているのは確かです。注意が散漫だということ、動き回る、衝動性がある、順番を待てない。並べない、給食を配るときに一番に行ったりとか。授業の時も「手を挙げて」という時に、手を挙げないで答えを言うとか。そういった子供たちです。こういった子供たちは、そういうルールがよく理解できない。だんだん自分は違う子なんだ、相手にされない子なんだと自信を無くしてしまって、その弊害はとても大きいです。だから、こういった子供たちについては、自信を失わないように持っていくことが大切です。授業でも校庭から音がするとそちらに夢中になってしまう。同時に2つのことができない。一つのことに夢中になると、もう一つのことはすっかり忘れてしまう。忘れ物が多い。そういった子供たちです。こういった子供たちは、小学校の学年が上がってくると少しずつ収まってくるのです。特に落ち着かなく動き回る、衝動性、待てないとか、突き飛ばすとかこういったことが減ってきます。ただ、注意散漫というのは中学生になっても残るようです。それで、良いお薬がありまして、それは、メチルフェニデートというお薬です。これは中枢神経系の覚醒系のお薬です。どうして中枢神経系の覚醒系のお薬が子供たちに効くかというのはあまり良く分かっていません。これを使うと、朝、学校に行く前に飲むとお昼休みぐらいまではもちます。今まで注意が散漫だったものが前よりも授業に集中できる、落ち着いていれる。お昼休みに薬が効かなくなるので2回目のお薬は保健の先生に預けて、保健室に行けばまた次を飲ませてくれる。そうすると、落ち着いてきますし、突発性も減ってきますから友達に受け入れられて一人ぼっちだという感情も減って、友達と会っているうちに色々と学んでい

くわけです。最近、メチルフェニデートの一日中継続する薬が出てきまして、それを処方しています。もう一つ別の中枢神経系の覚醒系でないお薬アトモキセチンも出てきました。

次は不登校ですけど、不登校も小学校の1年生で起こってくるものと、5、6年生で起こってくるのは少し違います。1年生で起こってくるのはやはり分離不安です。僕がいない間にお母さんが病気になったらどうしよう。お母さんが僕がいない間にいなくなったらどうしようという心配を持つようです。特に家がゴタゴタしている場合は、お母さんが実家に戻るとか言っていると、ちゃんと知っているわけですから、自分が学校に行っている間にお母さんがいなくなったらどうしようという不安が高まるわけです。お母さんの分離不安は、この子がちゃんとあの踏切、あの踏切って時々小学生が巻き込まれた事故があります。あの踏切をちゃんとうちの子は通れるかしら？学校でいじめられていないかしら？そういう形でお母さんの不安が起るわけです。それで、ちょっと嫌なことがあるとお母さんは「もう、学校に行かなくていいよ」と言って、子供を家で過ごさせる。そういうことがきっかけでだんだん学校に行けなくなることもあるのです。小学校高学年になってくると、やはり僕は本当に生きている意味があるのかしらとか、そういうことも考え始めます。ちょっとした哲学者になるわけです。やはり、人間関係って友達の中での順位とか色々あって、僕は何者かしらとか、そういうことを考え始めます。僕って何者かとか、僕は生きて行く価値があるのかとか、そういう自分の生き方とかそれに絡み合ったようなことがあって、友達関係で傷ついたことをきっかけに学校に行けなくなる。今まで自分が誇りと思っていた成績優秀がうち崩される。もっと優秀な人がいっぱいいるということに気づいて、もうどんなに頑張っても駄目だという時に、自分の自尊心が壊れて学校に行けなくなるのが起るわけです。だから、不登校の子供というのは、怠けではなくて、良い子で親思いの、親の自慢の子というのが多いです。そして、親の期待に応じて良い成績を出して良い学校に行ってくれるのですけども、もうこれが精一杯だ、自分はこれ以上やれないというときにガクンとくるわけです。場合によっては、こんな自分にしたのはお母さんだとか、お父さんだとか言って、「人生を返してくれ」とか、まだ始まった人生は10数年ですけど、「返せ」と言うのです。親の期待というのは「こういう子であってほしい」という事が楽しみで育てるわけです。小学校1年ぐらいまではそれでいいんだけど、3、4年生になってくると子供たちも自分というものを考え始めてくるので親が「こういうことをやってほしい」ということから手を引かなければいけなくなります。自分が小さい時にピアノが習えなかった、無理してでも子供には



ピアノを習わせてあげたいと思ってピアノのレッスンに行かせる。お母さんを喜ばせるのは楽しい。ところが、学年が上がってくると、お母さんを喜ばせるためだけに自分は生きているのかと疑問を感じて、それでちゃんとそういうこと言える子であれば良いんだけど、それでも我慢していることもあるし、一生懸命頑張ってついにガクンと来ちゃった。こういう段階で「いいのよ。好きなことなんでもしてね」と親が言っても、そういった子は、好きなことがないんです。だって、一生懸命に親の期待に応えることで生きてきたから。お勉強を期待された子はお勉強して、ピアノを習わされた子はピアノを一所懸命にする。それが、こういう段階で、「好きなことをやってくれ」って言われて、今までのことは一体何なのと思うわけです。突き放されている感じになります。だから、こういった子供たちは、特に高学年の子供たちはこれから自分のやりたいものを探していこうという姿勢が大事です。そして、本当にやりたいことが見つかるのは、それから4、5年かかります。ずっと自分のために生きてこなかった子供は自分探しに時間がかかります。だから、お父さん、お母さんに僕はこういう時に言います。時間がかかりますね。でも、本当にやりたいことが見つかった時に「お父さん、お母さん、学校に行きたい」と言い始めますから、その時のために学費は貯めておいてください。この場合、エリートコースには乗れないけど、その代わりに本当にやりたいことをやれる子供になります。時間はかかりますが、二人三脚でやっていきましょうと言って、お父さんが居れば三人四脚です、その形でお父さん、お母さんも応援しながらやっていくわけです。それが不登校の対応です。

次は、嘘や盗みですけども、子供は嘘と思わない嘘たくさん言っています。お母さんを喜ばせたいからつく嘘と、これ以上叱られたくないからつく嘘があります。「嘘はいけません」と言われても、子どもも本当に困ってしまいます。子どもはいろいろ言うけどもその場逃れの嘘も言うし、いろいろ空想もあります。子供は非常に空想豊かで、そういう空想が現実と混じってしまいます。「この子は嘘つきだ」と言いますが、小学校の低学年まではそんなに焦らないことです。それから、盗みの問題は、お母さんの財布からお金を盗んだりするのですが、最初は物が買いたくてお金が欲しいということよりも、実はそういう盗みは、お母さんは僕のことを本当に愛していてくれたら自

分に注目してくれるはずだ。だから、結構ばれることをやるわけです。ばれたいのです。結局はお母さんの愛情を試しているわけです。僕のことを本当に大事に思っているんだったら、こういう時にちゃんと叱ってくれるはずだと。話を聞いて叱る。そういう意味があるのです。だから、子供たちがやっている嘘や盗みは、実は意味があるんですね。つまり、お父さんとかお母さんの愛情や、注目を試しているのだと。だから、そこで反応して、ちゃんと答えなければいけません。「お母さん、忙しくてあまり相手してあげなかったね」と言って、そういった話をするのです。これを無視したり放っておくと、だんだん盗むこと自体が面白くなります。スリルがあるわけです。それを友達にばらまくと友達が寄ってくる。これがまた快感になってくる。そして非行になっていきます。ですから、非行になる前にこれに気づけば、非行に進む事をくい止めることができるのです。子供の嘘は、結構、空想まじりだから、小学校の3、4年生までは空想まじりです。「試験で100点取ったよ」とか言って、いつも50点なのに。喜ばせたいのですね。でも、それがずっと続いていくと本当にずるいことをやる子になる。そういったときはこれに気づいて、この子は試験のことが負担になってきて、窮屈な生活をしているのだと思って、僕らがそういうことをキャッチしたら僕らも態度を変えて行かなければいけない。だから、子供の成長に沿って上手にする。子供に代わりにやってもらうということは、小学校1、2年までは良いですけど、3、4年生になってきてピアノはやりたくないと言ったら、それからお母さんがピアノを習いに行けば良いわけです。自分が子供時代にできなかったことを、もう少しすれば子供さんの手も離れますから、ピアノを習いに行けばいいわけです。人に代わりにやってもらおうと思うと、ものすごく期待してできないことまで要求してしまう。自分ではしないことも子供にさせてしまう。自分は甲子園で活躍したかったけど出来なかった。父親が子供に期待をして猛特訓するわけです。子供は最初は嬉しいですよ、お父さんが一生懸命相手をしてくれるから。でも、もっと他にやりたいことが見つかるかもしれない。そういう時にお父さんは、その甲子園の夢を子供に託すのではなく、例えば、どこかの高校のコーチになったりして、自分の子じゃないけどもそういう高校生の指導をして自分の夢をかなえる。そういうことをやっていくのが、この時期の大人の大切な仕事ではないかと思えます。

Prof. Saku's Commentary

最近、我が家に初孫が誕生しました。生まれたばかりで、いつになったら笑うのだろうなど、昔、子供が生まれた時のことは思い出せないのです。また、子供がどう育っていったかもよく覚えていません。西村教授の話聞いて、多分私は、幸せな子育てをしたのではないかと感じました。私は循環器内科ですから、急性期の病気を専門にしていますが、子供の心の在り方が、どう変化して、どう影響を受けるものか、長期にわたって力強いフォローが必要であること等、再認識させられました。西村教授の話は素晴らしく感動的でした。